

平成28年8月吉日初版作成

永遠の生命に気づき、
それを現わす

高嶋善三郎

目次

消えてゆくのはすべての苦惱	3
真実の自分を知る	3
闇が崩れてゆく姿を自分と同一視した	5
不幸等は守護霊守護神にコントロールされている	7
直観力を磨き、神性復活する	8
運命それ自体が今の自分ではない	9
永遠の今として、宇宙にひびきを放ちつづける今の自分	10
永遠の生命に気づき、それを現わす	11

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせします。

(電話) 〇四―七―二二―三七五二

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

消えてゆくのはすべての苦悩

この7月の富士道場で、「果因説による大成就の共磁場を創り上げる行事」が行われ、第二部で行われた「手放せていない過去と現在の想い、未来に抱く不安恐怖を自ら浄める行」は、大変印象に残るものでした。

この行事は、『富士聖地行事速報』によりますと、本来は消えてゆくゆく姿であるのに、私たちはまだ過去を掴み、手放していないもの、また、これさえなければ自分は神性で完璧なのに、と見ないことになっているものにスポットライトを当て、見つめることにより私たちは一層強くなり、愛の人間になり、進化創造していくことを目的として行われました。

ここで注目すべき点は、私たちはまだ過去を掴み、手放していないもの、また、これさえなければ自分は神性で完璧なのに、と見ないことになっているものが消えてゆく姿に直面したとき、重要なことは自分が我即神也の我になっているか、または我即神也の我を自覚できないまま、即ち業想念をまだ手放していない我のままなのかによってその後が異なってくるということです。前者の場合、完全に苦悩は消えてゆきますが、後者の場合一部分は。消えてゆくかもしませんが、苦悩は完全に浄められないで、潜在意識の中に戻り残るのです。

この行事では、果因説による大成就の共磁場にいる私たちは、その共磁場の光とご神事により、我即神也の我になっていたため、紙

に書き込めた不安恐怖は浄められたといえます。

ここで、私たちが、認識すべきは、消えてゆくものは、潜在意識の中にたまっていた、自分の過去世から現在にいたる誤る想念、つまり神の御心から離れた想念、不安恐怖に象徴されるすべての苦悩であり、運命と現われた失敗などの体験記憶は、これからの愛と調和と美を現わしていくための智慧として輝き出すのです。この部分は後の項(6ページ)で詳しくふれています。

真実の自分を知る

それでは、不安、恐怖を手際よく浄めてゆくために、日頃どうしたらよいのでしょうか。

まず第一に、自分の存在の意味を明確に知り、実感することです。私たち人間はどこから来て、どこへ行くこととしているのかを知ることです。

私たちは日々ご神事をやっています。これらのご神事は何のために行うのかということをはっきり理解することが必要なのだと思います。それは我即神也の我をどれだけ実感できるのか。そのためにも、自分の存在の意味を明確に理解することが必要なのです。

昔から、ソクラテスが「汝自身を知れ」とかデカルトが「我思うゆえに我あり」とか、有名な言葉が伝わっていますが、それらの言葉を聞いても、それはそうだと思いが。それがどうしたのか、また

私たちが生きていくうえで、どういふ智慧になるのか、明確には説明されていません。

昔の聖者賢者の言葉の中で、最もポイントになるのが、釈尊の説法を記録した『般若心経』や、老子の言葉を記録した『道德経』ではないかと思います。これも五井先生の解説により、はじめて理解できるようになるのですが。

『般若心経』の文末に、「般若波羅蜜多の呪を説く。即ち呪を説いて曰く。羯諦(ぎやてい)、羯諦(ぎやてい)、波羅羯諦(はらぎやてい)、波羅僧羯諦(はらそんぎやてい)、菩提婆訶(ぼじそわか)般若心経」とありますが、五井先生は、「この言葉を「般若波羅蜜多の真言を説く。明らかによ、真理を明らかにせよ、さすれば、神界に昇れるのだよ。」と解説されています。

その真理とは、端的に言えば、この肉体界は、神界(実在界)の現身(うつつみ)であり、顛倒(てんとう)(夢想)肉体世界は実在であり、すべてであるという幻想と錯覚(さくご)を離れて、その真理を明らかにしていけば(即ち自分の本体は神界にあるという自覚をもち、その視点からすべてを解釈して、生きてゆけば)この肉体を持ったまま自由自在心を得る、即ち大悟を開くことができ、すべて(死、生、苦など)に把われ(とらわれ)がなくなるといふものではない。

また、五井先生著の『老子講義』14講では、「人を知る者は智なり。

自ら知る者は明なり。人に勝る者は力あり。自ら勝る者は強し。足るは

を知る者は富めり。強いて行つ者は志有り。」(『道德経第33章』)があります。

五井先生の解説に従って、翻訳すると、次の通りになります。

人を知るのは頭で知る智でもできるが、想いを静め、心を深めて、じつと、生命の本源の世界にまで入ってゆかないと、真実の自己、大生命の分生命である自分というものを知ることができない。あらゆる業(ご)と波動を超える程の強い意志力は、やはり明といわれる程の心境にならぬと現われぬことなのである。想念を常に物質世界の中に置かず、神の中に生きっている人は、如何なる環境にいても、足ることを知る人であり、心富めるものである。何事にも全力を挙げてびつかってゆける人こそ志有る者として、神は天命を成就させるのである。

自分とは何かに焦点をあわせて整理すると、次のようになります。

自分について、生命の本源の世界に繋がっている自分と、肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分、言い換えれば、真実の自己と現われの自己がある。この二つの自己の区別を知ることとは、心を深めて、じつと、生命の本源の世界にまで入ってゆかないと出来ない。真実の自己と現われの自己とが区別が出来るような心境を(めい)という。真実の自分を知り始めると、すべての想念行為は正しくなり、自由になり、他人の言に左右されたり、地位や物質や情愛で動かされたりすることがなくなり、神のみ心のまま、本心そのままの行為ができるようになると言われている。

では、五井先生は、人間について、どのように解説されているので

ようか。

人間は、親神様(宇宙神)につながっている直霊守護神守護霊であり、それが、動きだし、幽界に行くとか、魂になり、もっと粗い波動になると、魂要素となって肉体になっている。そして霊魂が肉体界で働くうちに、魂魄要素に引きずられて、本来の自由を見失ってしまったところに、迷い(業)が生じて、現在の肉体人間となっている。

魂の方は肉体において種々の体験を経、霊界において分霊と合体し、ついには神そのものの直霊とも合一して、今度は守護神的働きをするようになるといわれているのです。

そして、ここで言われている肉体での体験とは、肉体界に神性を顕現する、即ち愛と調和と美をこの肉体界に現わすこととされているのです。

では、どのように神性顕現しようとしているのかというと、五井先生は、「大霊が、七つの霊に働きを分けて、いわゆる職能というか、働きの特色とどうか、使命とどうか、ともあれ、七つの色に分かれた。これを七つの直霊と私は呼んでいる。この七つの直霊が各自のいのちを働かだし、互いに交流し合い助け合って、この人類世界に、やがて神の世界を完成しようとしている。この七つの直霊から、分霊が生まれ、その分霊から又分霊が生まれているが、その分霊たちは、いずれも、七つの直霊の、いずれかの特色を強くもち、後の六つの要素は、その特色の裏面で、この特色を助けて働いているわけです。各分霊がそつした一つの特色と、六つの補助的働きをもっと活躍している。人間は自分の特色の他の六つの要素の働き

を、その時その時に体験としてマスターしながら、本来の特色を深めつつ、人間的にも調和完成された姿となって直霊に帰一していく道をたどっていく」と解説されています。

我即神也の我は、壮大なる使命を帯びた神の分霊(魂)であり、愛と調和と美の世界をこの肉体世界に現わそうとしている我であります。根本的要件は、生命の本源の世界に繋がっている自分と、肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分、言い換えれば、真実の自己と現われの自己があるが、この二つの自己の区別ができる我だといえるのではないでしょう。

闇が崩れてゆく姿を自分と同一視した

第二に、不安、恐怖の本質を理解することです。

特に、病気や不幸や貧乏に直面すると、どうなるんだろうかと、不安や恐怖になるものです。また、過去病気や不幸や貧乏を体験し、それらを思い出すたびに、不安恐怖になるかもしれません。

不安、恐怖の本質を理解するのに参考になるのが、五井先生の、般若心経に示されている顛倒(てんとう) 夢想等についての説明です。

人間が神様(直霊)から分かれ、霊界、幽界、肉体界へと降りてきたとき、神様(直霊)への想い(感謝)を疎んじ、五感六感に感ずるもの、他は無いと思つさかさまな考え方や、真実は神仏と一体であり、本体は、自由自在な神霊である人間を、肉体や幽体という限定された器的、物質

的なものと夢のような思い方であると。そしてこの思い方をしたため、業生、即ち神のみ心から離れた、誤てる想念が生じたのであると解説されています。

「誤てる想念（業生）は、人間が神様（直霊）から分かれ、霊界、幽界、肉体界へと降りてきたとき、神様（直霊）への想い（感謝）を疎んじ、五感六感に感ずるものの他は無いと思うさかさまな考え方や、真実は神仏と一体であり、本体は、自由自在な神霊である人間を、肉体や幽体という限定された器的、物質的なものと夢のような思い方、顛倒（てんどう）した思い方をするようになったために生じたのです。（新しい般若心経の解釈」14ページ）」

また、顛倒（てんどう）夢想の思いの仕方になったいきさつとして、次のようにも、説明されています。靈魂魄として三界（靈界幽界肉体界）に活動している分霊はしだいに肉体人間そのものになってきて、**肉体外の六官（直感）直覚（神智）の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものはないものと思うようになり、人間とは肉体であり、心（精神）とは、肉体の機関が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとは感じられないうつになつてい**たと言われています。

「この霊・魂・魄として三界（靈界・幽界・肉体界）に活動している分霊はしだいに肉体人間そのものになってきて、肉体外の六官（直感）直覚（神智）の衰えを見せ、すべてを五官の

感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものはないものと思うようになり、人間とは肉体であり、心（精神）とは、肉体の機関が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられないようになっていった。（『神と人間』25ページ）」

さらには、**業想念（誤てる想念）が生じた原因として、五井先生は、「分霊（魂）が、地上界的な肉体身を纏っているため、本来は神の光の側にあるにもかかわらず、神の光が地球界の闇を進んでゆくとつれて、種々な動揺や変化が起こり、闇が崩れてゆく姿を自分と同一視してしまつたことにより不安恐怖が生じたのです」と説明されています。**

「この業というものは神がなくて現われたものではなく、間接的にはやはり神の力によって動かされているのでありますから、神がその必要を認めない時には、崩れ去るのであります。光一元の世界には闇がないと同様に、闇一元の世界で光の存在がない場合には、闇はそれ自身闇であることを自覚することはありませんが、ひとたび光がそこに放射され始めますと、光と闇との区別がはっきりついてまいります。そして光が前へ進むにつれて、闇は自身の姿をそれだけずつ、削り取られてゆく形になってきます。

神がその光線を地球界に働きかける場合には、どうしても地球界と同じような物質体の肉体人間を必要とするのです。ところがこの肉体身というのは、地上界に属する物質なので、

地上界の性質をそれ自体が持つておりますので、神の光が地球界の闇を進んでゆくにつれて、未開発が開発されてゆく過程において、種々様々な動揺や変化が起こってまいります。

それを肉体人間が反対的に考え、かえって自身を闇の側に置いてしまい、闇の崩れゆく姿を自身の崩れゆく姿と同一視してしまったのであります。

この不安恐怖つまり神の光、靈性を離れた考え方が無明であるわけで、それが業想念の生まれた原因なのであります。(白光誌1958年5月号7ページ)

そして、顛倒(てんどう) 夢想の思いの仕方によつて、誤てる想念(業生)は、あまりにたまりすぎると、自己の生命の磁場(肉体、幽体)が汚れるのです。それを洗い浄めようとして、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力に押されて、汚れが外部にだされてゆきます。「この汚れが取れてゆくに従つて、生命が輝いてゆくわけですが、この汚れの取れてゆく姿が、病気や不幸や貧乏となるのです。」

「この誤てる想念(業生)は、あまりにたまりすぎると、自己の生命の磁場(肉体、幽体)が汚れるのです。それを洗い浄めようとして、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力に押されて、汚れが外部にだされてゆきます。この汚れが取れてゆくに従つて、生命が輝いてゆくわけですが、この汚れの取れてゆく姿が、病気や不幸や貧乏となるのです。(白光誌1963年7月号9ページ)」

以上から、不安恐怖は、神の光としての自分が地球界の闇を進んでゆくにつれて、種々様々な動揺や変化が起こり、闇が崩れてゆく姿を自分と同一視してしまい、神の御心から離れた想念を発し、それがたまりにたまり、それを洗い浄めようとして、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力に押されて、汚れが外部にだされてゆきます。「この汚れが取れてゆくに従つて、病気や不幸や貧乏などの運命となって消えてゆく姿になった。そして、その姿が消えてゆき、生命が輝いてゆくものなのに、その姿に把われ、あらためて不安や恐怖の想念を発し、不安恐怖の想念の層を厚くしていたといえます。」

この問題を解決するには、まず不安恐怖を起こした根本の原因を知り、それを解消することでしょう。それは、顛倒夢想の思いの仕方を改めることです。言葉を換えれば、本来の自分は、生命の本源の世界に繋がっている自分であり、肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分ではないと確信し、真理の祈りや真の言葉によつて、光そのものとなる即ち我即神也の我を取り戻すことでしょう。

そうすれば、不安恐怖の原因と考えていた、病気や不幸や貧乏は、いったん現われ、消えてゆけば、生命が輝いていき、二度と現われないうちことができます。また現れたとしても、無限ではなく、必ず有限なもので、時とともに、なくなつてゆくと言えます。

不幸等は守護靈守護神に「コントロールされてる」

第三に、不幸や病氣や貧乏は、私たちを守護霊守護神のコントロールのもとに、現われてきていることを知ることでしょう。

自己の生命の磁場（肉体、幽体）が汚れると、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力に押されて、汚れが不幸や病氣や貧乏などの姿となって、外部にだされてゆき、それに従い生命が輝いてゆくのですが、このような現象は、肉体だけが自分だと思いついて入っている人間にとって、とても耐えがたいことなのです。

これを超えるには、守護霊、守護神の存在を知り、その援助を得る以外、手段はないといわれているのです。

それはこのような業想念の消えてゆく姿の現象は、この肉体を通して、愛と調和と美の世界を現わすという、守護霊守護神の計画のもと、コントロールされ、現わされているからです。

守護神守護神として働いている力が90%、肉体側の分霊と魂の力というものは、わずか10%だといわれています。

私たちの目の前には、守護霊守護神がいろいろとやり繰りし、私たち人間が受けるべきものの90%を身代わりに受け止め、残り10%のものを現わし、即ち大難を小難にして、私たちの肉体想念を浄め、神我一体化を深めてくださっているのです。

ですから守護霊守護神に感謝して、任せる以外道はないのです。そして、守護霊守護神との一体化が進むと、自分の願い事を守護霊守

護神に伝えると、それに沿って実現されていきます。

また、自分以外の人の天命を祈るときも、自分の守護霊守護神を通して、相手の方の守護霊守護神に光を渡すイメージで行うのが大切です。相手方が具体的にどのような行動するかは、相手の守護霊守護神が手渡された光により対応されてゆくのです。

そのためにも、私たちは、日頃から自分自身に光を十分降ろしておくことが重要になります。

「神（直霊）としては人間内部にいらながらも、真理をわからせようとして、自らが分かれて守護神ともなり守護霊を創って、外面的に人間に智慧を与え力を与え、業から守っているのです。」

（白光誌1974年3月号8ページ）

「一人で生きていると想っているけど実はそうじゃない。神の生命そのままの直霊（なおび）から肉体の内側と外側にわかれたのです。内側は肉体の中に分霊と魂として入り、一方の外側には、大神様のはじめからの計画で守護霊と守護神に守らせることにしたのです。守護霊守護神として働いている力が90%、肉体側の分霊と魂の力というものは、わずか10%なんです。」（白光誌1964年5月号15ページ）

直観力を磨き、神性復活する

以上三つの真理を知り、理解して認識すべきことは、私たちは、無限なる叡智や力を発揮できる素質をもった存在であることです。

これを実際に發揮してゆくための力が直観力なのです。

この直観力は、人間が神様（直霊）から分かれ、靈界、幽界、肉体界へと降りてきたとき、神様（直霊）への想い（感謝）を疎んじ、私たちが顛倒夢想の思いの仕方になって失った、別の言葉でいえば、忘れてしまったものであることは、既にふれたとおりですが、それを復活させることが、私たちが全力で取り組むべき課題なのです。

どのような直観力を復活させれば、よいのでしょうか。

昌美先生によると、それは、否定的観念、暗黒的観念の波動を見極める直観力だと言われています。これが復活してくると、神の叡智をキャッチできるようになると言われています。

そのためには、まず、自らが放つ観念と波長が合う、周りの観念を引き寄せくるので、祈り、自らの観念を浄める。そして日頃の自らの観念のあり方として、すべての物事について原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスにも愛を注ぎ、感謝を注ぎ、否定的観念や言葉は、死語にしていくことを勧められています。

否定的観念、暗黒的観念の波動を見極める直観力が、大いに養われてくると、自らが放つ波動が神の波動、光の波動であり、強力なるパワー、エネルギーを持ち、宇宙神の光の一筋そのものであるため、いかなるマイナス波動からも決して影響は受けなくなり、すべては完璧にうまくいく。幸せで、平和で、調和に満ちた人生が結果としてもたらせてくると言われています。

また、『白光誌2016年6月号』の「呼吸法の唱名を最大限に活用す

る」では、インスピレーションや直観力やビジョンなど、私たちのスピリチュアルな能力、神聖な能力を開発する方法として、「すべては完璧、欠けたるものなし、大成就」という唱名を、息を止める間に唱えながら行う呼吸法を挙げられ、息を吸い込む時に、目の奥の、頭の後ろのほうに意識を集中させることを勧められています。これをやると、目の奥の、後頭部の箇所から宇宙を見渡すことが出来る。この目を神の目と表現されています。

運命それ自身が今の自分ではない

このような心境になった時、次のような五井先生のお言葉が納得できるようになるのではないのでしょうか。

「あれは運命だ、これも運命だ、という人がいます。大体の人は、自分が運命の流れの中に入ってしまっただけで、その流れに左右されていくだけです。」

ところが本当は、自分というものと運命というものは違うのです。運命というものは、前生を含んだ過去において作ったものが、今現れて消えてゆく姿だけのものなのです。

運命それ自身が今の自分ではないのです。たとえ運命がよからうと悪からうと、今の自分のもではないのです。すべて過去世からの観念行為が現れては消えてゆく姿なのです。ですから運命環境が悪くても、それは今の自分が悪いからではない。また運命が素晴らしくよくても、それは今の自分が善いから、えらいから

というわけではない。それはすべて過去世から想念行為の蓄積が、現れて消えてゆく姿なのです。

ですから運命や環境が悪いから、といって今の自分を嘆き悲しみ、責め卑下することはありません。また運命環境がよいからといって、感謝こそすれ、自惚れたり威張ったりしてはいけません。それはみな消えてゆく姿なのです。

では今の自分はどこになるのか。今の自分は神の中にいるのです。神の生命と全く一つの個性をもった永遠の生命なのです。そして現れてくるものはすべて消えてゆく姿。

この信仰に徹すると、生き死の恐怖不安に把われなくなり、生き続ける生命がある、という不動心を会得できるのです。『如是我聞』73ページ187)

大体の人は、自分が運命の流れの中に入ってしまつて、その流れに左右されているため、我即神也の我(真実の自分)を感じることにできないと言われているのです。

そして、我即神也の我を感じるには、運命それ自身が今の自分ではないということを知るべきだといわれているのです。たとえ運命がよかろうと悪かろうと、今の自分のものではないのです。すべて過去世からの想念行為が現れては消えてゆく姿なのである。ですから運命環境が悪くても、それは今の自分が悪いからではない。

この環境とは、自分の現在の姿、即ち才能、容姿や家族なども含まれています。

環境、運命が素晴らしくよくても、それは今の自分が善いから、えらいからというわけではない。それはすべて過去世から想念行為の蓄積が現れて消えてゆく姿なのだ。そう確信した、今の自分は神の中にいるのです。神の生命と全く一つの個性をもった永遠の生命だと言われているのです。これを信じ続けると、生き死の恐怖不安に把われなくなり、生き続ける生命がある、という不動心を会得すると言われていますが、この「生き死の恐怖不安に把われなくなる」ということが、我即神也の我、真実の自分の感覚なのではないでしょうか。

永遠の今について、宇宙にひびきを放ちつづける今の自分

さらに、真理を知ってはじめて理解できる、五井先生のお言葉がもう一つあります。それをみてみましょう。

「変化変滅し、消えて去ってゆく、この人生を唯一と信じて生きている愚かさから、脱却して、改めてこの人生を見直さなければいけません。神のみ心とつながっている一瞬一瞬が、過去、現在、未来という、業生の現象社会を超えた、真実の「今」でありまして、その今を生かしてゆきつづけることによつて、人類は真に地上天国を現出することができます。」

人間が、現在と呼んでいるのは、一体何をさしているのでしょうか。当然、今の事だよ、という答えがかえってくると思います。ところが、その今は、一瞬の後には過去になっていってしまします。そして今まで未来であった今がそこに現われてくるのです。

この今はこの世の時間帯の中で、過去として消え去ってしまう今なのです。

ところが、真実の今、宗教的にいう今というのは、一瞬一瞬で消え去ってしまう今ではなく、神のみ心と縦につながって、永遠の今として、光を放っている今なのです。今が一瞬ではなく、神につながった一瞬から、永遠の今として、宇宙にひびきを放ちつづける今となります。

普通にいわれる今は、一瞬一瞬のことであり、宗教的の今は、一瞬を機として、その人の心を永遠のひびきと一つにひびきわたらせる、消ゆることなき今ということになるのです。ですから、普通いう今と、宗教的な今とで、その内容がまるで異なっているのです。それはあたかも、色即是空の、色が玉石混合のこの世の色であり、空即是色の色が真理そのもの、光明波動そのものの色である、ということと同じことなのです。『愛すること』113ページ)

我即神也の我、真実の自分について、一瞬一瞬で消え去ってしまう今の自分ではなく、神のみ心と縦につながって、永遠の今として、光を放っている今の自分だといわれているのです。それを別の言葉で、色即是空の、色が玉石混合のこの世の色の自分ではなく、空即是色の色が真理そのもの、光明波動そのものの色の自分であるといわれているのです。

永遠の生命に気づき、それを現わす

前2項「運命それ自体が今の自分ではない」「永遠の今として、宇宙にひびきを放ちつづける今の自分」を通して認識すべきは、私たちはどのような運命の中にあっても、今の自分は神の中におり、神の生命と全く一つの個性をもった永遠の生命であるということです。

永遠の生命とは、肉体界の、生き死が存在する生命の在り方に対する神界の生命の在り方を示した概念です。その意味から考えると、私たちは、神界と肉体界に同時に存在するといえます。

また、それに今まで気づかなかったのは、運命と現われた苦惱即ち神としての存在にあるにもかかわらず、闇が崩れてゆく姿を自分と同一視してしまった想念に惑わされていたからといえます。

別な言葉で言えば、生命の本源の世界に繋がっている自分と、肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分の区別が出来なかつたともいえます。

既にふれた、三つの真理の理解とそれにもとづく対処法により、本来の直観力を取り戻せば、その気づきは、可能になることであろう。

いろいろな苦惱に襲われたとき、今の自分は神の波動の中にいるのだと信じ、その神の波動に心を集中し、神としての自分を取り戻せば、即ち我即神也の我を自覚すれば、すべて苦惱は神の光により癒され、浄められていくであろう。そして、生き死の恐怖不安に把われなくなり、生き続ける生命がある、とこつ不動心を得ることが出来るのではないだろうか。